

納沙布岬から渡って旧ソ連をさまよった後、ウクライナで家庭を持った菊地浩さんは、没後に遺族が出版した自叙伝で「日本は良い国だろうか」と自問している。生前、連絡を取り合った横浜在住の行弘公子さん（69）には、菊地さんの思いが理解できる気がした。

行弘さんは旧ソ連旅行の際に菊地さんの知人と知り合ったことがきっかけで、菊地さんが22年ぶりに祖国の土を踏んだ1975年、横浜で会った。翌年から文通を始め、最初の手紙は76年1月に来た。消印はウクライナ南部オデッサから約80キロ離れたベロゴロド・ネストロフスキー、妻や娘との暮らしなど近況報告が中心だった。

79年9月の手紙で菊地さんは、一時帰国した際に見た戦後復興が進む日本と、自分が住む共産主義の旧ソ連を比べて、複雑な気持ちのをぞかせた。「現代の日本はあまりにも近代化しすぎていて、まるで浦島太郎のような寂しい日が多かったが、あなたのお母さんと会って初めて心がくつろぎ、本当に昔の自分に戻ったかのようなうれしい気持ちになった」

時代は冷戦の真ただち中で、旧ソ連軍のアフガニスタン侵攻を受け、日本は米国に同調して80年のモスクワ五輪をボイコット。日ソ関係はいっそう冷却化した。

「カーター（米元大統領の）政策の犠牲となった日本やアメ

# 憂いと望郷、筆に込め

## 2国彷徨

ソ連人になった日本人の物語③



リカのスポーツマンが、『スポーツは平和だ』という美しいスローガンの下に華やかに開かれたオリンピックのモスクワの地を踏めなかったのは、いかにも残念なことだった。五輪に合わせて行弘さんが旧ソ連に来るのを心待ちにしていた菊地さんは、80年8月の手紙に無念の思いをつづった。

最後の手紙は81年4月。菊地さんは行弘さんに、書き上げた自叙伝の出版を頼んだ。「（本の）第一の目的は、今昔の軍国主義に復帰しようとしている日

本の上層部の悪夢を粉砕しようと努めている一般国民の一助となりたいたいことです」

米国では旧ソ連と対決姿勢を鮮明にするレーガン大統領が就任した。手紙の翌月に訪米した鈴木善幸首相は、日米共同声明で同盟関係を初めて明記し、防衛協力が加速し始める。

菊地さんは、自叙伝に祖国への憂いと反戦の思いを記した。「人間の自尊心とか感情とか余分なものは容赦なく蹂躪して肉弾を型打ちに打ち出していく日本の軍隊」（戦争になれば）突然何の理由もなく見も知らぬ他人から殺人の対象に選ばれる」。

菊地さんが本を書き上げるまでには3年かかった。行弘さんは出版先を探して断られたが昨年、遺族が実現させたことでほっとしている。「菊地さんは自叙伝の出版に並々ならぬ意欲を持っていた。日本とつながっていたいという望郷の念だったのではないか」。行弘さんは、菊地さんが会った時に漏らした言葉が忘れられない。

「妻も娘もいるが、日本のことを考えると望郷の思いで気が狂いそうだ。でも、家族がいるので日本に帰りたいわけではないし、こちらの生活の方が自分には合っている」。菊地さんを支えていたのは「二つの祖国」への思いだった。

ウクライナの菊地さんから日本の行弘さんに送った手紙。絵ハガキも含めて数十通に上った